

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Functions of 'suru' and 'yaru' in Combination with Non-verbal Nouns with Case Marker 'wo'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 望, OTSUKA, Nozomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002089

「する」と「やる」

—非動作性名詞がヲ格に立つ場合—

大塚 望
(新潟大学)

キーワード

ヲ格名詞, 意味と用法, 機能動詞, 実質動詞

要 旨

漠然とした行為を表す動詞に「する」と「やる」があるが、両者は互いに交替可能な場合と交替不可能な場合とがあり、両者の用法は異なることが予想される。しかし、「やる」は「する」の俗語とする見方が一般的で、両者を比較した研究は少ない。また「音がする」「息子を医者にする」などの「やる」の使えない表現の指摘はあるものの、両者が表現の上で混在する「名詞ヲする／やる」についての詳細な研究は見られない。先行研究では「する」のとする名詞は典型的に動作性のものであるとの指摘が多いことから、本稿では逆に典型的ではない名詞に注目し、動詞・形容詞と派生関係にない名詞、及び現象を表さない名詞（非動作性名詞）をヲ格にとる表現に考察を絞った。そして、実例を主として「する」と「やる」の意味と用法について考察した結果、「する」は専ら機能動詞として働き、「やる」は機能動詞から実質動詞まで広い用法をもつことがわかり、その実態を表1としてまとめることができた。これは、「やる」が「する」の俗語であるというだけでは片付けられない独自の意味・用法をもつことを示すものであった。

1. はじめに

「する」と「やる」は、どちらも漠然とした「何らかの行為」を表す動詞であるが、両者はその意味と用法において共通する部分と共通しない部分とをもっている。両者は非常に使用範囲が広い¹ため、全範囲を一度に扱うことは結果的に両者の使い分けを十分に説明することを難しくしてしまう。したがって、両者の意味と用法を明らかにするうえでは分割して考察する方が有益であると考え、本稿は考察の対象となる形式を「～ヲする／やる」に限定する。この形式は「する」と「やる」の交替が可能なものが多く、その使い分けが最も曖昧かつ重複する部分であるため、先行研究でも多くの問題を残している。更に、そのヲ格に立つ名詞にも様々なものが考えられるため、「～ヲ」の名詞を「動詞・形容詞と派生関係にない名詞、及び現象を表す名詞以外の名詞＝非動作性名詞」に絞ることとする。よって本稿では、上記のような名詞をヲ格にとる場合の「する」と「やる」²について、両者の意味と用法の異同を明らかにすることを目的として考察するものである。

2. 先行研究と課題

「する」と「やる」についての先行研究は少なく、意味・用法に関するものとなると森田良行(1977)

を除いてはほとんど見られないのが現状である。森田(同)では、特に「する」について詳細に記述されており、「する」の作る文型ごとにそれぞれの格に立つ名詞の種類と、動詞の表す意味について述べている。

本稿の考察対象である「～ヲする」は、森田(同)の「AハCヲする」の一部と「BニCヲする」の項にあたる。まず、「AハCヲする」について『する』対象(C)には名詞が来るが、その名詞の意味範囲、意味内容に応じて『する』の意味も動く。」とし、いくつかに分けてその意味を記述している。それを以下に森田(同)から抜粋して挙げる。

- (1) 状態を表す無意志的な「する」:「対象とする人や動物の身体部分がある様相を呈していること」「格好、様子、表情、態度などの外観・外見に表れた特徴や、主体が所有する固有の性質・様相などをCに立てることもできる」
- (2) 行為と状態を表す意志的な「する」:「装身具などを身につけることを表す」「身体の外面的状態となる」
- (3) 行為を表す意志的な「する」:「(ア)“ある任務・役職・職業につく。商売などを営業する”」「(イ)“日常の動作・行為・活動をなす”」

更に「BニCヲする」では『包丁の背でたたいた豚肉に塩・胡椒をします』のような例もまれにはある」とし、「ふつう品物はCに立たない」と説明している。

一方、「やる」については『ヲ格に立つ語は行為を表す名詞で(略)意志的な動作・行為によって成立する状況に限られる。』と述べるに留まり、用例も「する」に比べると少ない。このように非常に重要な指摘が多いものの、以下の点が疑問として残る。

- 「～ヲする」のヲ格名詞にはどのような性質の名詞がどこまでの範囲で立ち得るのか。これに関連して、(イ)「日常の動作・行為・活動」とはすべての日常の動作・行為・活動を指すのか。あるいは、その日常の動作の範囲は決まっているのか。
- 「～ヲやる」のヲ格名詞には行為を表す名詞しかないのか。
- (3)は「やる」への言い換えが大体可能だとするが、どの程度可能なのだろうか。
- 「その名詞の意味範囲、意味内容に応じて『する』の意味も動く」とあるが、どのような意味範囲、意味内容に応じて、どう動くのか。「やる」にも同じことが言えるのか。

これらの点から、次の課題が導き出せる。

- ① 「する」と「やる」のヲ格名詞の記述と分類。
- ② 「～ヲする」「～ヲやる」の用法の記述と以下の考察。
 - (1) ヲ格名詞はどのような性質をもつか。
 - (2) 表す意味は何か。

次に、「する」と「やる」についての比較研究ではないが、「する」のもつ動詞としての機能について重要な指摘をした研究がある。それが、村木新次郎(1980, 1991)に見られる「機能動詞³研究」である。そこでは「する」は「典型的な機能動詞(同1991)」とされ、「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞(同1991)」と定義づけられている。これまでの「する」と「やる」の研究では動詞自体が示す機能についての言及があまりなかったこと

を踏まえ、新たにこの機能動詞という概念を導入し、「する」と「やる」の機能的な相違についても考察していきたい。

村木(同)から得た課題としては、次の2点が挙げられる(課題③④としてまとめる)。

③ 「する」は常に典型的な機能動詞として働くのか。また「やる」に関する記述は見られないが、「やる」にも「する」と同様の機能があるのか。

そして、動詞の「実質的意味の空疎化にはいろいろな段階がありうる(同1991)」と述べていることから、

④ 「する」と「やる」は実質的な意味の空疎化という点でどのような段階を示すのか。あるいは、どのような意味の連続体をなすのか。

③と④を明らかにする作業では、「実質的意味のありなしによって、実質動詞と対立する(同1980)」という記述に従い、実質的意味の有無を判断基準とする。

先行研究から得られた以上のような課題を明らかにすることを目的として考察を進める。

3. 考察の対象

前節で課題が明らかにされたが、「する」と「やる」のヲ格に立つ名詞には様々な性質⁴のものが考えられるため、考察の対象を更に絞り込む必要がある。

先行研究の中には「する」と「やる」のヲ格名詞について次のような指摘がある。「『～をする』の対格名詞は典型的に動作性のものである。(佐藤琢三1995)」。また機能動詞研究の側から「する」は機能動詞の典型例であり、その「機能動詞と結びつく名詞は典型的には行為を表す名詞である(村木1991)」。また、森田(1977)「やる」の項では「『ヲ』格に立つ語は行為を表す名詞」とされる。このように、特に「～ヲする」あるいは「～ヲやる」のヲ格名詞が「動作性」という性質を典型的にもつという指摘がなされている⁵。それでは、逆に典型的ではないとされる、この他の名詞はどのような性質をもち、またどのようなものがあるのだろうか。本稿では、典型的ではない方に両者の相違を説明する事実が潜んでいるのではないかと考え、「動作性」以外の名詞に焦点を当てて考察していくことにする。

そこで、この「動作性」以外の名詞を抽出するため、先に動作性名詞を規定し名詞全体からこの動作性名詞を差し引くことによって、非動作性名詞を選定したい。但し、「動作性」の判断を内省だけに頼ると判定に揺れが出るものもあるため、形態的な特徴をその判定材料の基本とする。村木(1991)の「動作性名詞」の考察を基に、ひとまず動作性名詞を次のように分類する。

【動作性名詞】

• 動詞と派生関係にある名詞

サ変動詞語幹……練習, 決定, 影響, 実験, 手術, 洗濯, 運動, 相談, 休憩など

動詞の連用形……盗み, 代わり, 賭け, 脅し, 戦い, 笑い, 伸び, 続きなど

合成語の前要素……焚き火, 利き酒, 編み物, 食べ方, うめき声, 悔し涙など

合成語の後要素……種まき, 逆立ち, 草取り, 歯磨き, 早食い, 共働きなど

二つの動詞性成分合成語……買い食い, 行き来, 立ち読み, 放し飼いなど

- 形容詞⁶と派生関係にある名詞……元気, 自由, 楽, 不幸, 幸せ, けち, 親切, 貧乏など
- 形容詞に接尾語「さ」を付随させた名詞……だるさ, 痛さ, 暑さ, 寒さ, 暖かさ, 高さ, 恐ろしさ, 恥ずかしさ, 傲慢さ, 謙虚さ, 愚かさ, 不気味さ, さわやかさ, かわいさなど
- 形容詞に接尾語「み」を付随させた名詞……痛み, かゆみ, 悲しみ, 温かみ, 厚みなど
- 現象を表す名詞

自然現象……稲妻, 落雷, 津波, 地震, 夕立, 吹雪, 竜巻, 雷雨, 日没など

生理現象……息, あくび, くしゃみ, まばたき, おなら, いびきなど

病理現象……咳, 吐気, 悪寒, じんましん, 大病, 盲腸, はしかなど

感覚・知覚表現……感触, 音, 気配など

以上の名詞群は、動詞または形容詞と派生関係にある、言わば形態の上から明らかに動作性を具えた名詞と、形態からは派生関係にはないが現象という動作性を表す名詞である。これに加えて「～ことヲする／やる」の「こと」でうける名詞節は動作性または事象性をもつので、上の中に入るものとした。

よって、本稿では上記のような名詞群以外の名詞がヲ格となって「する」または「やる」と結合する表現に注目して、両動詞の意味と用法について考察する。典型的ではないとされる用法を考察することによって、新たな側面を明らかにできると考えるものである。

4. 考察の手順と方法

改めて、ここで考察の手順と方法についてまとめておきたい。前節までで、考察の対象をまず形態的な特徴を基に抽出した名詞群に絞った。次に、それらの中で「～ヲする」もしくは「～ヲやる」を作り得る名詞群だけを残し考察する。その考察にあたっては、「～ヲする」「～ヲやる」という、名詞と動詞が結合した形式（語結合と呼ぶ）における、名詞の性質と動詞の機能について見ていくものとする。まとめると次のようになる。

1. 主として形態上の特徴を基にして非動作性名詞を抽出する
2. 1の中で「～ヲする」「～ヲやる」を作るものを抽出する
3. 「～ヲする」「～ヲやる」におけるヲ格名詞の機能上の特徴（性質）、及び動詞部分の機能を実質的意味の有無を基に考察する

しかし一方で、最初の出発点として3を選び（1, 2の手順はまったくとらずに）、「～ヲする／やる」という語結合を見たときに名詞部分が非動作性名詞であると判断できるような場合だけを考察するという方法も考えられる。3から出発する方法というのは、名詞の性質は単独の姿ではわからず、語結合の中で初めて決定付けられるものであるという考え方に基づくものであり、それは妥当な考え方でもある。

しかし、あえて本稿で3からの出発という方法をとらなかったのは、次のような理由による。つまり、第2節の課題でも述べたが、動詞の機能、特に先行研究でも指摘されていた「実質的意味の空洞化(村木1991)」という様々な段階の姿、あるいは機能動詞から実質動詞までの連続性といったものを捉えるためには、1→2→3という流れが有効だと考えられるからである。

もし3の方法だけをとった場合、ヲ格名詞はすべて非動作性、つまり具体的な「物」などを表すモノ名詞しか考察対象に入らないために、動詞部分は実質的な意味の空疎化など見られるはずもなく、すべての用法における動詞は実質動詞という結果しか得られないことが大いに予想される。そして、このことによって、形態的あるいは意味的に一見、非動作性だと感じられる名詞が語結合においては動作性という性質を十分に示し得るという用法（これがまさに途中の段階あるいは連続性の一部なのであるが）との接点を切り捨てることになる。以上の理由から、「する」と「やる」を考察する本稿では、あえて1→2→3の手順を踏むことにした。

用例は実例として文学作品30点（本稿掲載分は内25点）、シナリオ9点（本稿掲載分は内8点）、エッセイ1点、辞書1点から抽出し、実例を補うものとして内省によって判定⁷した名詞を付け加えた。なお、一つの名詞がいくつかの用法に重複して用いられることもあり、その用法ごとに表す意味もまた異なるため、名詞の分類にあたっては大まかな意味グループに分けた。次項からの項目名が意味分類の結果である。

5. 「～ヲする」ヲ格名詞の分類と動詞の機能

「～ヲする」だけを作り、「～ヲやる」を作らないものには次の2つの用法が見られた。（以下、例文の該当箇所を下線を付す）

5.1. 様相・様子

- (1) 「お前はあんなさまをしながらそれでも潔白だと云える積りか？」（痴人）
- (2) 「そんな恰好をするほど寒いのかね。」（雪国）
- (3) 青い目にばら色の頬をして、きよらかなきりっとした看護婦の服装をしていました（ビルマ）
- (4) 小さい女の子が出て来て、厭な眼つきをして私を見ては引っこむ。（放浪記）
- (5) あの瘦せつぼちの小さな体軀をしながら相当強いのを引いたからネ。（本因坊）
- (6) 豊子さんが何だか、そんなような口ぶりをしたことはあったけど（青春）
- (7) 牛が一匹優しい眼をして私を見ている。（放浪記）
- (8) 思い切ってふざけた無作法な態度をする。（モオツァルト）
- (9) 黒い頬鬚をはやして、堂々とした威厳のある様子をしていましたが、（ビルマ）
- (10) 伯父は固い表情をしたまま、何も答えなかった。（青春）
- (11) 「変な顔をするねえ。はっはっはっはっは」（野火）
- (12) 記事にそえてある写真を見ると、「万次郎」は、ラグビーボール型をしており（みみず）
- (13) 昼間は、上がY字形をした棒によって、亀の甲らは持ち上げられ（みみず）
- (14) 割って見ると、きれいな黄色をしている。（みみず2）
- (15) サルシーフィ（西洋ごぼう）は、ごぼうと同じような根をしているが（みみず2）

以上のようなものが実例には見られ、森田（同）の『『Cヲ』の上に修飾語を冠して』とあるように点線のような修飾語もしくは指示代名詞を伴った表現で使われている。また次の例のように

修飾する動詞が名詞と一体となって慣用句的なものになっているものもある。

(16) そしてこの頃は逢っても知らん顔をすることを努めていた。(友情)

「様相・様子」を表す用法に見られるヲ格名詞を次に列挙しておく(いずれも修飾語を伴う)。

【様相・様子】を表す用法でのヲ格名詞群

(目, 体, 顔, 頭, 髪, 面, 鼻, 唇, 齒, 脚, 腕, 肩, 肌, 頬, 皮膚, 年, 気性, 性格, 目つき, 体つき, 顔つき, 体軀, 顔立ち, 目鼻立ち, 口ぶり, 表情, 態度, 様子, なり, ふり, ざま, 色, 形, 服装, 格好, 姿, 型, 根……)

この用法には「変な顔をする／している」「汚い恰好をする／している」のようにル形とテイル形のどちらも取れるものと、「ばら色の頬をしている」「不思議な形をしている」のようにテイル形しか取らないものがある。以下の例を見てみる。

(ア) 私がそう言うと、彼女は急に変な顔をした。

(イ) 私が話している間中、彼女は変な顔をしていた。

(ウ) 彼女はきれいと言うには程遠く、いわゆる変な顔をしているのだ。

(エ) 白雪姫はばら色の頬を／*する／している。

(ア)と(イ)は顔の変化あるいはその変化した状態の持続、または変な顔を作る動作の持続を表していると考えられる。一方(ウ)は、彼女の顔の状態を述べているが、その状態というのは変化の結果ではなく、もともとそうであるという彼女の属性を表している。そして、テイル形しか取らない(エ)は、(ウ)と同様に主語の属性である状態だけを示すものである。このように、「様相・様子」を表す用法では「顔」がヲ格に立つ例のようにル形テイル形どちらも可能で、状態だけでなく変化という動きまでを表す用法と、「頬」がヲ格に立つ例のようにテイル形のみ可能で、状態だけを表す用法との2つが見られるのである。

それから、この用法は森田(同)や他の先行研究では「する」に見られる特徴として述べられているが、「やる」にも次のような実例が見られた⁸。

(17) 「どう? こうやるとあたしの顔は西洋人のように見えない?」などと云いながら鏡の前でいろいろ表情をやって見せる。(痴人)

更に「お父さん、もう一回変な顔をやって。」や「少女漫画みたいなキラキラお目々をやります。」という例も考えられる。しかし、全ての表現において両者の交替が可能なわけではない(『*あんなざまをやりながら』『*そんな恰好をやる』『*小さな体軀をやりながら』『*優しい眼をやって』『*無作法な態度をやる』『*不思議な形をやった』『*固い表情をやったまま』)。つまり、状態を表す用法では全く交替不可能である。「やる」が交替可能なのは変化の用法の中でも、「顔」の動き(『表情』も含まれる)や「格好」を表す場合に限られる。顔でも「? 厭な目つきをやる⁹」「*生意気な口ぶりをやる」など「目」や「口」は不可能である。しかも、この変化を表す「顔」に関して「する」に比べると表現の範囲は更に狭いと言えよう(『女は悲しい顔をした／*やった。』『生意気そうな顔つきをして／*やって出て行った。』)。但し、故意にその様子を作ってみせるような場合には、ある程度許容されるようである(キラキラお目々の例など)。

次に、動詞の機能とヲ格名詞の性質について見ていく。「変な顔をする」の「する」は「変な顔

への変化を表し、「変な顔」は「する」と結合することによって、単なる「変な顔」という物体を示す名詞ではなく動作性を示す名詞へと変化していると考えられることができる。一方、「ばら色の頬をしている」は「ばら色の頬」であるという状態を示し、動作性を帯びるには至っていない。あくまで「ばら色の頬」という具体的な物としての側面を示している。このように、変化を示す用法と状態を示す用法ではヲ格名詞の性質に違いが見られる。そして、「する」自体に実質的な意味があるかという基準から見れば、実質的な意味はなくヲ格名詞の意味内容を作ること、あるいはその状態、を表すのみである（これを『実質の意味なし』と記す）。つまり様相・様子を表す「する」は機能動詞としての働きを示していることがわかる。更に機能動詞であるということは、実質の意味を名詞部分に預けているために単独で用いても、様相・様子の意味が出てくることはない（これを『単独不可』と記す）。以上のことをまとめると、次のようになる。

動作性名詞 ヲ する／している；実質の意味なし；単独不可：機能動詞

非動作性名詞（具体物） ヲ している；実質の意味なし；単独不可：機能動詞

以上、様相・様子の用法には「状態を表す無意志的な『する』（森田1977）¹⁰」だけではなく、動作を表す意志的な「する」があることがわかった（一部「やる」も見られた）。

5.2. 着装・付帯

- (18) 彼は手袋をしたままの手で女の頬をしたたかに打った。（青春）
- (19) 黒の蝶ネクタイをして、いつも真白なワイシャツを着ていた。（青春）
- (20) 結婚指輪をしている男の手をかざす。（皆月）
- (21) 塩、コショウを適量加えて、鍋にふたをして、弱火で二時間、煮る（山小屋）
- (22) 傷は手当をして包帯をしてありました。（ビルマ）
- (23) 頭に布をまいて、長いきちんとしたルーンジをしています。（ビルマ）
- (24) 扉を開けてくればよかったとか、窓は閉めてくればよかったとか、カーテンをしてくればよかったとか、色々思っても（みみず）
- (25) ビニールトンネルをして雨にあてないようにし、なおかつ、農薬を用いて病気を防ぎ、梅雨時期に収穫してしまう促成栽培が、かぼちゃ作りの主流だ。（みみず）

これらは、着装あるいは付帯を表す用法としてまとめることができる。次のような名詞がヲ格に立つものである。

【着装・付帯】を表す用法でのヲ格名詞群

体あるいは体の一部に付ける物（眼帯、マスク、猿ぐつわ、お面、首輪、ネクタイ、蝶ネクタイ、マフラー、ショール、ストール、スカーフ、チェーン、ベルト、エプロン、おしめ、おむつ、手袋、軍手、グローブ、ミット、かんざし、バンダナ、イヤリング、ピアス、指輪、指貫、鼻輪、チャック、リボン、ブローチ、ネックレス、マニキュア、眼鏡、腕時計、手錠、湿布、包帯、枕、水枕、氷枕……）物に対する付帯物（栓、重石、輪ゴム、キャップ、クリップ、ホチキス、カバー、塩、塩胡椒、酢、カーテン、蚊帳、ビニールトンネル……）

森田(同)では以上のような名詞を伴う表現は「AハCヲする」と「BニCヲする」とに分かれて

おり、「AハCヲする」例の方が「BニCヲする」例よりも多く挙げられている。しかし、森田（同）の「相手Bに対してなされる」「Bには、人・物・事柄などが立つ」に従えば、「BニCヲする」に当てはまるものが増えるはずである¹¹。実際、付帯するという事自体、何かは何かに対して付くことを示すものであるから、（文中に現れなくても）二格をとる例が増える。「額に氷枕をする」「赤ちゃんにおしめをする」「爪に真っ赤なマニキュアをする」「犬に首輪をする」「大事な物にカバーをする」「お菓子の袋に輪ゴムをする」「女の子に眼帯をしてあげた」「夫にネクタイをしてあげた」などがある。但し、その動作が何に対してなされるものかということが、定まっている場合はそれをBに立てて「BニCヲする」を作ることはあまりない。「ネクタイ」→相手：首「？首にネクタイをする」、 「マスク」→相手：口「？口にマスクをした」など。

また「ふつう、品物はCに立たない(森田1977)」とあったが、以上から品物であってもCに立つものも少なからず見られることがわかる。

これら「ネクタイをする」「手袋をする」「手錠をする」「塩をする」は、「具体的な物」をつける、はめる、巻く、かけるなどの動作を表しており「する」自体に実質的な意味がある。しかも、ヲ格名詞は動作性名詞ではなく、あくまで具体物である。この2点からこの用法における「する」は実質動詞であると考えられそうである。しかし、純粋な実質動詞である「話す」「食べる」などが単独でもその意味を十分に示しうるのに比べ、この用法における「する」は単独では付帯の意味を表せない。単独不可である以上、まったくの実質動詞とは言えない。以上を考え合わせると、「する」は機能動詞であり、しかし語結合の中での限定ではあるが実質的な意味を担い得るという点で実質動詞であるから、実質動詞寄りの機能動詞と考えることができる。

非動作性名詞（具体物）ヲ する；実質の意味あり；単独不可；実質動詞寄りの機能動詞

5.3. その他

一つの分類項目を立てるほどはないが、次のような例も見られたのでここに挙げる。

(26) 一カ月ばかり勤めていた粟おこし工場の二十三銭也にもさよならをすると（放浪記）

(27) 竜造とさくらが相手をしている。（男）

(28) 「見つけてくれたら、もっとお礼をするわ」（愚か者）

(26) は他にも様々な挨拶ことばを入れることができ、「おやつもらったら、ありがとうをしようね。」「こんにちは／おはよう／こんばんはをする。」、いずれも語結合の中では単に挨拶のことばではなくて挨拶行動自体を示している。つまり「さよならという挨拶をする」「ありがとうの挨拶をする」の意である。(28) は接頭語「お」を付けずに「礼をする」と言うこともできる。しかし、「？相手する」や「*礼する」という動詞は不自然なため、「相手」「礼」を形態的に非動作性名詞であると判断し、ここに分類した。但し、接頭語「お」を付けた表現の方が「お相手する」「お礼する」のような動詞表現の可能性を高めるが、常に接頭語のある姿で現れるもの「お供をする」などは「お供する」というサ変動詞との関係が強いのでこれとは一線を画すものとする。この他には実例では見つけられなかったが、「お茶（喫茶の意）をする」などもある¹²。

6. 「～ヲやる」ヲ格名詞の分類と動詞の機能

「～ヲやる」だけを作り、「～ヲする」は作らないものに次の4つの用法が見られた。

6.1. 嗜好

(29) 「近頃君も煙草をやるのか、君は煙草をやらぬ様に思っていた」(浜菊)

(30) 「どうだ、前祝いに一杯やるか」(青春)

(31) 「お前は酒はどうだ」と伯父は言った。「まあ、人並みにはやれます」(青春)

(32) きせるで一服やる¹³。(学研)

これには「コーヒー」「紅茶」などの一般的な嗜好は含まれない。主に「酒」「煙草」「麻薬」などの嗜好に限られ、具体的には次のような名詞である。

【嗜好】を表す用法でのヲ格名詞群

(酒, ビール¹⁴, スコッチ, パーボン, 焼酎, 煙草, 煙管, パイプ, 紙煙草, アルコール, ドラッグ, 麻薬, 阿片, シンナー, スピード, シャブ, 覚醒剤……)

「酒をやる」「煙草をやる」「麻薬をやる」は、ヲ格名詞を飲む、吸うなどの動作を表す。しかも、この動作は習慣から止められないもの(悪癖)となり、その結果好ましくないという判断が下される可能性のあるものが多い。この点に関連して、中本正智(1986)に『やる』のもっている強い意志性が、この語を、『やり手、やり口、やり込める』など、マイナスイメージの意味へと転化させていく」とあるが、マイナスイメージの表現は「～ヲやる」という形式においてヲ格名詞が酒、煙草、麻薬だけに制限されるという点にはっきりと現れることがわかる。

この語結合におけるヲ格名詞は具体的な物で動作性はない。また動詞部分には「飲む」「吸う」などの実質的な意味を汲み取ることができるため、実質動詞と考えられる。しかし、単独ではこの実質的な意味を表すことができないという点では、純粹な実質動詞とは言えない。つまり、実質動詞に近い機能動詞ということになる。ただし、「1杯やる」「ちびりちびりやる」「一服やる」などの表現に見られるように、ヲ格名詞を切り離しても「1杯」「ちびりちびり」「一服」などからこの「やる」がお酒を飲むこと、煙草を吸うことを表すことができることを考えると、この「やる」はかなり実質動詞に近い動詞でもある。このことをまとめると次のようになる。

非動作性名詞(具体物)ヲやる；実質の意味あり；単独不可(様態・量を表す語句がある場合、可)：かなり実質動詞に近い機能動詞

6.2. 害悪・殺傷

(33) 「彼奴をやっつけるよりしようがねえ。やらなきや、こっちがやられちやう」「俺をやったららどうだ」「お前やるんなら、最初にやってる。」(中略)「どうでもいい。とにかく一緒に行こう。安田をやって、食糧を作ってから、米さんとこへ行こうじゃねえか」(中略)手榴弾を持った安田を殺すために永松が考えた方法は、彼の若さに似合わぬ、狡猾なものであった。(野火)

(34) 小屋には鶏の羽が散乱していた。「鶏、やったんですか」「二匹だけしめたが、あとは逃げ

られたよ」と上等兵は笑った。(野火)

(35) 「やられた」と負傷を告げる声が聞えた。(野火)

(36) 「大島隊だ。ブラウエンへ斬り込んで、散々やられての帰りさ。落下傘部隊と協力するはずだったんだが、上空でやられて、三十人ぐらいいっきゃ降りやがらねえ。それもさっさと、俺達の方のジャングルへ逃げ込んで来やがった。お蔭でこっちもやられちゃったのさ。」(野火)

(37) 「どうも、こうもねえ。すっかりやられちゃったよ」「何をやられたんだ」「何をって、——あんなひでえ奴はねえ」「誰がひでえんだ」「あの安田のおっさんと一緒に歩くことにきめたなあいいが、何のかんのって我儘ばかりいやがって。体のいい小使よ。お蔭様で、今じゃ、こうやって煙草売りさ。あの野郎てんで動かねえんだ」(野火)

(38) 「(略) 心臓をやられた可能性が有るっていうんだが、ハッキリしないんだ」(あつもの)

(39) 「あんた、どうしてもその婆さんをやると言ったわね」「ああ、やってやるさ」「うちの姉様をやってみない?」(略)「俺はね、寝る女の子ならどれだっていいんだ。それで、おまえの姉さんを、そのアパートでやるのかい?」(冬の旅)

(33) (34) (35) (37) (39) は後に続く文脈の中で「やる」の意味が明示されている。(33)「やる」は最後に出てくる「安田を殺す」によって「殺す」ことを意味していることがわかる。(34)は「しめた」こと、(35)は「負傷」したこと、(37)は「体のいい小使い」にされたことを意味している。いずれも殺傷あるいは害悪を与えることなどを表し、受身の形で被害を表している。(38)では「心臓」が悪くなったことを表している。誰かまたは何かによって悪くなることが引き起こされたわけではないのに、受身の形をとることがある。例えば「祖母は畑仕事の最中に腰をやられてずっと寝たきりだ。」「この投手は肩をやられてからはぱっとしないね。」などは怪我をさせたものがはっきりしない、あるいはない場合でも受身を使って表現している。

そして、(39)は主として女性を表す名詞がヲ格に立ち、害悪でも強姦の意味合いが強い。

この用法では「敵をやる」「胃をやる」「鶏をやる」などの語結合を作り、ヲ格名詞を殺す、傷つける、害する、悪くするなどを表す。特にヲ格名詞が女性の場合には「犯す」という意味を表す場合がある。また「やりやがったな」「やっちまえ」「やられた」など単独でもこれらの意味を表すことができるので、実質動詞である。先の「嗜好」の用法と同様にマイナス評価¹⁵の行為を表すことができるものである。

この用法でのヲ格名詞は人を表す名詞であれば、個人名から役職名まで具体的に何でも可能であり、動物をヲ格に立てる場合も同様である。それから、「胃」「胃腸」「肝臓」「心臓」「肺」などの臓器や「肋骨」「尾椎骨」「頭蓋骨」などの骨部分、また「腕」「脚」「頭」「腹」「肩」「腰」などの身体部位などもヲ格に立つ。ここでは、身体の内側にある部位である臓器や骨部位なども、身体の外側にある部位と合わせて「身体部位」としてまとめておくこととする。なお、特に身体部位をヲ格に取る場合、受身形で自然な表現になるものが多い。

【害悪・殺傷】を表す用法でのヲ格名詞群

(人(あいつ、お前、敵、女、社長……)、動物(鶏、馬、豚、牛、猫……)、身体部位(胃、胃腸、

肝臓，肺，肋骨，尾髖骨，頭蓋骨，腕，脚，頭，腹，肩，腰，目……))

非動作性名詞 (人，身体部位，動物)ヲ やる；実質の意味あり；単独可：実質動詞

6.3. 放送・放映

(40) だが呆然と眼を開くと，血の鳴る音がすっと消えてお隣でやっている蓄音器のマズルカの，ピチカットの沢山はいった嵐の音が美しく流れてくる。(放浪記)

(41) 今日やられる芝居も彼は公にではないが，可なり悪口云った。(友情)

(42) 山田，ラジオの『♪真夏の出来事』が聞こえてボリュームを上げる。「なんだよ，ナツメロかよ気持ち悪い。ロックンロールとかやってねえのかよ……」(アドレナリン)

この用法でのヲ格名詞には具体的な放送番組名や演劇や映画の題名なども含まれる(「NHKで8時から『おしん』をやる。」「四季劇場で『ハムレット』をやる。」等)。これには2つの用法がある。1つは「NHKでは8時からニュースをやります。」のような放送する，放映するなどの活動を表す用法で，その動作主は文中では明示されない。(40)～(42)はこの例で，動詞部分には実質的な意味(放送する，上映する，放映する)があるが，単独ではこれらの意味を表すことができないので実質動詞寄りの機能動詞だと考えられる。もう1つの用法は，実例は見当たらなかったものの「私は今度映画をやります。」のような例に見られるもので，ヲ格名詞の意味内容やそれに関する幅広い動作・行為を表し，動作主が明示されており動作性が強い。しかし，動詞部分には実質的な意味はなく機能動詞である。ヲ格名詞には具体的な放送番組名，放送曲名あるいは上映する劇，映画の題名などがあり，他には「ニュース」「ドラマ」「ミュージカル」「映画」などがある。それをまとめたものが次である。

【放送・放映】を表す用法でのヲ格名詞群

(ニュース，番組，ドラマ，映画，演劇，ミュージカル，具体的な番組名，題名，曲名……)

非動作性名詞 (具体物)ヲ やる；実質の意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞

動作性名詞 ヲ やる；実質の意味なし；単独不可：機能動詞

6.4. 趣味・習い事・勉強

(43) 「何というえい景色でしょう。政夫さん，歌とか俳句とかいうものをやったら，こんなときに面白いことが云えるでしょうね。私ら様な無筆でもこんな時には心配も何も忘れますもの。政夫さん，あなた歌をおやんなさいよ」「僕は実は少しやっているけど，むずかしくて容易に出来ないのさ。山畑の蕎麦の花に月がよくて，こおろぎが鳴くなどは実にえいですなア。民さん，これから二人で歌をやりましょうか」(野菊)

(44) むかし，謡をやった頃に読んだ本がある。(冬の旅)

(45) 秋江は声楽をやっていた時期がながくあった。(レズ)

(46) 「そんならお前，大学院に残って博士コースをやったらどうだ」(青春)

(47) 「あなたは博士課程をやるつもり？」(青春)

(48) 「あたし，英語が習いたいわ」(中略)「それから音楽もやってみたいの」(痴人)

- (49) 「義務教育は中学まででしょう。ここは、職業訓練専門施設の学校として公認されているのです。木工のほかに、钣金、印刷、機械仕上げ、ラジオ・テレビの修理、ミシン裁縫の部門がありますが、僕は木工をやらせてもらいました。結構たのしいですよ」(冬の旅)
- (50) 元よりそれは文学をやる仲間同士で云ったので法科に行っている仲田とは殆んど(友情)実例では圧倒的に「やる」例が多く、調べた限りでは「する」は「学問をする」のみ見られた。
- (51) ・あなたは学問をする方だけあって、中々御上手ね。(こころ)
- ・学問をすることも才能を磨くことも(青春)

趣味・習い事に関する行為か(趣味ではなく単に行為の場合もある)、学問・勉強に関する行為かは文脈によって決められるものなので、2つを1つに分類した。名詞は以下の通りである。

【趣味・習い事】を表す用法でのヲ格名詞群

(ギター、ピアノ、バイオリン、チェロ、ビオラ、三味線、写真、カメラ、お茶¹⁶、お花、お琴、俳句、和歌、歌、声楽、民謡、日舞、バレエ、園芸、ガーデニング、油絵、日本画、陶芸……)

【学問・勉強】を表す用法でのヲ格名詞群

(～学、文学、言語学、物理学、考古学、数学、天文学、国語、理科、社会、生物、体育、美術、木工、～語、英語、フランス語、中国語、～史、美術史、日本史、世界史、～コース、博士コース、～課程、博士課程……)

趣味・習い事の場合¹⁷「写真を撮っている」「お琴をやっている」などは、ヲ格名詞を趣味にしていること及びそれに関わる動作全体をも表しており、実質的な意味は取り出せないで、機能動詞である。また、ル形のままではいくらか不自然さがあり、テイル形の方が自然なものが多い。そしてヲ格名詞は、例えば「写真がある」の「写真」は具体物だが、「写真を撮っている」の「写真」は写真を撮ること現像することなど趣味としての一連の動作を示していると考えることができ、動作性名詞である。

学問・勉強の場合「文学をやる」「考古学をやる」などはヲ格名詞を専攻する、研究する、勉強するなどの行為を表し、実質的な意味がある点では実質動詞と言える。しかし、ヲ格名詞を切り離して「やる」単独ではこれらの意味が表せないことから、実質動詞寄りの機能動詞である。

【趣味】動作性名詞 ヲ やっている；実質の意味なし；単独不可：機能動詞

【学問】非動作性名詞 ヲ やる；実質の意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞

7. 「～ヲする／やる」ヲ格名詞の分類と動詞の機能

「する」と「やる」どちらもとれる表現には次の4つの用法があった。

7.1. 遊戯・スポーツ

- (52) それはなぜかスポーツをしているときが圧倒的に多かった。(十八歳)
- (53) 運動場でドッジボールやフットベースをしている最中(十八歳)
- (54) それは、じゃんけんをして負けた者が、皆から順々にびんたを受けるという(装飾)
- (55) 体育でサッカーをする短パン姿の男子が、必死にボールを追っかけまわす姿が(装飾)

- (56) 私とナオミとはその頃しばしば兵隊将棋やトランプをして遊びましたが、(痴人)
- (57) 子供の時分に、内で姉さんが男の人とお花をする時(痴人)
- (58) つまり私とナオミでたわいのないままごとをする(痴人)
- (59) 有希はそれまで、体育で球技をやるときはいつも点とりやだったし、五十メートル走をしてもクラスで一、二をあらそうくらいのはやさだった。(十八歳)
- (60) 二人は冗談を云った末に、昔のように又馬ごっこをやったことがありました。(痴人)
- (61) 私は何より真っ先にあの時の遊戯をやってみよう。(痴人)
- (62) 「それでお前は、ダンスをやるって云ったのかい」(痴人)
- (63) 「所長はたぶん下の町でパチンコをやってるわ。」(生きたい)
- (64) 相手の学生は、いま仲間と麻雀をやっているからと言って、彼の誘いをことわった。(青春)

この用法を作る名詞には次のようなものがある。

【遊戯・スポーツ】を表す用法でのヲ格名詞群

(ゲーム、花火、かるた、トランプ、麻雀、パチンコ、めんこ、お手玉、将棋、ブランコ、鉄棒、シーソー、腕相撲、ままごと、かくれんぼう、じゃんけん、～ごっこ、馬ごっこ、ハイキング、キャンプ、リレー、マラソン、～メートル走、体操、水泳、野球、卓球、柔道、剣道、球技、テニス、バドミントン、サッカー、アイスホッケー、ダンス、スキー、ボクシング、レスリング、バスケットボール、ドッジボール、フットベース、バレーボール、ハンドボール……)

「ゲームをする／やる」「トランプをする／やる」「スポーツをする／やる」「テニスをする／やる」などの語結合を作り、これらの「する」と「やる」はヲ格名詞に示された遊び道具を使って遊ぶもしくはヲ格名詞に示された遊びを行う、またヲ格名詞に示された運動競技を行うといった意味を表している。動詞部分には実質的な意味はなく、どれもヲ格名詞の担う意味に伴った行為を行うことを表しているにすぎず、この用法での両動詞は機能動詞であると考えられる。また、遊び道具などの具体物はこれらの動詞と結合することで、トランプ遊びといった意味を含むようになり、動作性名詞へと変化している。

動作性名詞 ヲ する／やる；実質的意味なし；単独不可；機能動詞

7.2. 役職・役割・役柄

- (65) 浅二郎さんはイタチの襲来に備えて明方ごろまで鯉の見張番をすると云い(黒い)
- (66) 剣道部の顧問をしている権高な女教師であつたり(装飾)
- (67) その先生がピアノのわきに坐って、譜をめくる役をしていました。(ビルマ)
- (68) 氏は、三十四、五歳で、業務部の課長代理をしていた。(装飾)
- (69) 「それから、こちらは鑑定助手¹⁸をしてくれる小川香深さんです」(刑法)
- (70) 挽曳《ばんえい》競馬協会の役員をやっている男に見せたら(五味氏)
- (71) 前田は子爵であり、大臣をやった経歴もある。(人民)
- (72) 警視総監をやった頭のきれいな伊沢を送りこみ(人民)

この中に¹⁹は生業と重複するものも見られるが、「田中さんは学級委員長をしている。」のように生業ではないものもあるので、ここに項目を立て役職の名詞も入れることにした。先行研究では取り上げられなかったものとしては、役柄の名詞が見られた。具体的には次のものである。

【役職・役割・役柄】を表す用法でのヲ格名詞群

(～長、～係、～委員、役員、大臣、警視總監、～役、理事、幹部、顧問、幹事、仲人、責任者、司会、講師、助手²⁰、見張番、留守番、当直、キャプテン、アルト、ソプラノ、テノール、バス、ピッチャー、バッター、キャッチャー、仲人、司会、主人公、主役、ヒロイン、脇役、二枚目……具体的な役名など)

「役員をする／やる」「司会をする／やる」「主役をする／やる」などを作り、ヲ格名詞のような役職・役割・役柄を務めることを表している。動詞部分にはこのような実質的な意味がとれるものの、ヲ格名詞を切り離してしまうとこの意味は取り出せないなので、実質動詞寄りの機能動詞である。ヲ格名詞は、「役員は集まって下さい。」の「役員」とは違い、役職名または人物そのものよりもその役職に関する仕事やその仕事内容を意味しており、動作性名詞となっている。

動作性名詞 ヲ する／やる；実質の意味あり；単独不可；実質動詞寄りの機能動詞

7.3. 行事・集団活動・催し物

- (73) 住吉の神を勧請して燈籠ながしの祭をする。(黒い)
- (74) あるとき、仲田の家でピンポン大会をするからよかったらしに来てくれと云う通知(友情)
- (75) テストをする風景に被せて、(刑法)
- (76) ・なんせアメリカの大学では、週末になるとダンスパーティなんかやって(アメリカ)
・今日は家ですきやきパーティをやるそうだから(アメリカ)
- (77) 私なんか葬式をやりかけられちゃったんですよ(男)
- (78) ・なんでも小学校四年生の父が、受け持ちの先生に誤解されたことをおこって、級友をそ
そのかして一日ストをやったというのだ。(二十四)
・なにしろかれは、小学生でストライキをやったんだからな、前代未聞ですよ。(二十四)
- (79) ・「私？ 女優って、あんまり好きな商売じゃないもの、昔、少し素人芝居をやった事があるけど」(放浪記)
・「そこで『証言台』という一人芝居をしていましたね。」(刑法)

この用法に見られるヲ格名詞は以下のものである。具体的な催し物を以下の「～」に入れ、多様な名詞を作ることができる。

【行事・集団活動・催し物】を表す用法でのヲ格名詞群

(会合、座談会、ミーティング、～会、文化祭、祭り、～祭り、～大会、コンテスト、～コンテスト、コンクール、～コンクール、バザー、ミサ、パーティー、～パーティー、コンパ、合コン、～展、法事、～式、～回忌、～芝居、七五三、七夕、テスト、ストライキ……)

「ミーティングをする／やる」「会議をする／やる」「結婚式をする／やる」などは、いずれもヲ格名詞に示された集会・行事・儀式を開く、もつとといった意味を表している。動詞部分にはいく

らか実質的な意味が感じられるが、ヲ格名詞がないと「開く」「もつ」という意味を表すことができないので実質動詞寄りの機能動詞である。

動作性名詞 ヲ する／やる；実質の意味あり；単独不可；実質動詞寄りの機能動詞

7.4. 生業

- (80) 「(略) そこで長年刑事をしている彼にも、意見を聞いてみたいと思いました」(刑法)
- (81) 「優しい父親だった……高校の国語の教師をしてた……(略)」(刑法)
- (82) 市立病院の看護婦をしてる女でな、(飛び)
- (83) 半年前にこの町へやってきましたんだけど、どうも東京でヌードモデルをしていたらしい。(五味氏)
- (84) 内職をする女の姿が、(放浪記)
- (85) 「今夜は、庄野さんが遊びに来てよ、ひよっとすると、貴女の詩集位は出してくれるかもわからないわね。新聞をやっているひとの息子ですってよ……」(放浪記)
- (86) 「私、隣で板金工場をやっている笠森の父親ですが(略)」(あつもの)
- (87) そのどの家もめいめいの商売だけではくらしがたたず、百姓もしていれば、かたてまには漁師もやっている、そういう状態は大石先生の村とおなじである。(二十四)
- (88) ぼくは現在、四十八歳、次の二十年、つまり六十八歳まで、百姓仕事ができるとして、どんな農業をやっていくのかという時に、やっとこ探しあてた、ぼくなりの方角だ。(みみず)
- (89) 製糖会社をやっている藤山雷太にたのみ、新橋の美人芸者の写真を二枚もらって(人民)
- (90) 大学の先生をおやりになっているとか(男)
- (91) 電気製品の小売り店をやっていましたが(学校Ⅲ)
- (92) 「僕はね、バーテンをやりたいんだ」(冬の旅)
- (93) ニューヨークへ渡って空手修行に打ちこみ、いまでは道場の師範代をやっている(五味氏)

森田(1977)に「役職・身分・職種に広く使用できるが、他動詞『……をする』の場合は用法が限られるので注意する必要がある。」とあるように、「*大学者をする／やる」「*直木賞作家をする／やる」は言えないが、「先生をする／やる」「作家をする／やる」は可能である。肩書き、または修飾語句のついた生業の名詞はヲ格名詞にはなりにくく、同じ肩書きでも役職としての「～長、～委員」などは7.2.のとおりヲ格名詞になる。また、「職人」は単独使用ではなく「～職人」のような具体的な名詞として使われる。そして、企業に関する名詞ではヲ格に立つものは具体的な職種に関する会社名(製糖会社、板金工場など)や個人経営で規模の大きくないもの(小売り店、～屋など)に限られるようである(『*デパートをする／やる』)。

【生業】を表す用法でのヲ格名詞群

(旅館、～屋、下宿屋、床屋、魚屋、小料理屋、運送屋、酒屋、駄菓子屋、問屋、呉服屋、花屋、塾、居酒屋、～店、売店、小売り店、～工場、板金工場、～会社、製糖会社、内職、スナック、

酪農，農業，漁業，畑，田んぼ，先生，教師，医者，歯医者，弁護士，代議士，エンジニア，教員，百姓，猟師，漁師，大工，農家，占い師，看護婦，薬剤師，助産婦，産婆，保健婦，役者，保母，スチュワーデス，コック，ソムリエ，バーテン，モデル，師範代，刑事，警官，～職人……)

「先生をする／やる」「花屋をする／やる」などで，ヲ格名詞を生業にしている，もしくは経営する，営むことを表している。動詞部分にはこのような実質的な意味が感じられるものの，やはり単独ではこの意味を表すことができないので，実質動詞寄りの機能動詞である。これらは，単に「先生」という人物や「花屋」という建物を表しているというより，その職業に関する事に携わることや商業活動をするものという動作性の名詞となっている。

動作性名詞 ヲ する／やる；実質の意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞

7.5. その他

分類項目を立てられるほど用例はないが，次のような例が見られた。いずれも意味的に動作性のある名詞で，意志的な動作である。

- (94) 被爆病予防のおまじないに昨日からお灸をする²¹ことにしているそうだ。(黒い)
- (95) さればと云って道楽をするのでもありませんでした。(痴人)
- (96) 自分の信じている亡霊が，そんなへまをするとは(実朝)
- (97) ゴルフ場でガッツポーズをしている橋本。(学校Ⅲ)
- (98) いたずらをしてみたかった。(青春)
- (99) 「ふん，ない事があるもんか，女と男と勝負事をすりゃ，いろんなおまじないをするもんだわ。(略) 傍で見ていたらいろんなおまじないをやってたわ。」(痴人)
- (100) 此方はせいぜい彼女の計略に載せられてやって「ちんちん」と云えば「ちんちん」をする，(中略)，何でも彼女の注文通りに芸当をやっていれば(痴人)

8. まとめ

先行研究ではヲ格に立つのは典型的に動作性の名詞であるとされたことから，形態的に動作性の名詞ではないものを基本にそれらをはじき出し，典型的ではない用法について見てみた。その結果，それでも語結合のレベルでは動作性名詞が多いものの，「まれにはある²²」「周辺のなもの²³」とされていた非動作性の名詞あるいは具体的な物としての名詞もヲ格に立つことがわかり，しかも少なくないことが明らかになった。さらに，特に「やる」については「する」と異なる点が上記の4つの用法としてまとめられた。また，「する」が意志性に関わらない状態を表すことがあるのに対し，「やる」は専ら意志性のある動作を表すことがわかった。

9. 「～ヲする／やる」動詞機能の連続性とまとめ

村木(1991)に「機能動詞であるか実質動詞であるかは，その用法によってきまるもので」「機能動詞としての性格も(中略)典型的なものから実質動詞の中間的なものまであり，いわば連続している。」とある。ここでは，この連続性を捉えることで「する」と「やる」の異同を更に明らか

にしたい。これまでの考察結果をまとめる形で表1として示す。一番左の欄「動詞の機能」は機能動詞としての働きの強弱を①ヲ格名詞の性質, ②「する」と「やる」の実質的意味の有無, ③動詞単独でもその意味を表すか否か(可, 不可)の3つの点から考察したものである。ヲ格名詞をとるもの○, とらないもの×, とる可能性のあるもの△となっている。「ヲ格名詞の種類」で一つの枠組みに入っているものは動詞の機能の程度は同じである。

表1. 「する」と「やる」の動詞機能の連続性とヲ格名詞の性質

動詞の機能	ヲ格名詞の種類	ヲ格名詞の性質	する	やる	実質的意味	単独	
機能動詞	強	「遊戯・スポーツ」	動作性	○	○	無	不可
		「趣味・習い事」	動作性	×	○	無	不可
		「映画・演劇・放送番組」	動作性	×	○	無	不可
		「様相・様子」	動作性	○	△	無	不可
		〃	非動作性	○	×	無	不可
	弱	「生業」	動作性	○	○	有	不可
		「行事・集団活動・催し物」	動作性	○	○	有	不可
		「役職・役割・役柄」	動作性	○	○	有	不可
		「学問・科目」	非動作性	△	○	有	不可
		「着装物・付帯物」 「映画・演劇・放送番組」	非動作性 非動作性	○ ×	× ○	有 有	不可 不可
弱	「嗜好品」	非動作性	×	○	有	可 ²⁴	
実質動詞	弱	「人・動物」	非動作性	×	○	有	可

機能動詞としての働きの強い4つの用法(内『する』3つ, 『やる』3つ)から, 中間的な3つの用法(内『する』3つ, 『やる』3つ), そして弱い3つの用法(内『する』1つ, 『やる』2つ), 更に弱い1つの用法(『やる』のみ)までが見られた。そして, 実質動詞としての働きを示すのは1つのみ(『やる』のみ)であった。しかし, これも実質動詞としては, 他の実質動詞, 例えば「叩く」「食べる」「くだく」などに比べればその働きは弱い²⁵と言える。

また, 全体的に見ると「する」は機能動詞としての働きしかなく, この点は先行研究の指摘通りである。一方, 「やる」は実質動詞として働く用法も見られ, 非動作性名詞をヲ格に立てる場合に限れば, 「やる」の方が「する」よりも広い用法をもつことがわかった。また「する」の用法に共通する特徴は, その動作・行為が他者に何らか直接的な影響や物理的な働きかけのあるものではないという点である。もちろん典型的な機能動詞のヲ格名詞(動作性名詞)は動作の対象ではないため働きかけは当然少ないが, たとえ具体的な物の名詞であっても(「ネクタイをする」)働きかけは弱い。一方「やる」に見られる特徴は働きかけという点で強弱どちらも示しうることである。働きかけが弱いのは, 機能動詞の働きを示す用法であり, これこそが「する」と言い換え可能な箇所である。一方で働きかけが強い²⁶のは, 実質動詞の働きを示す用法であり, 特筆すべきはそれらの動作が好ましからざるマイナスイメージを伴うことがあるという点であった。

10. おわりに

以上、一旦動作性名詞を形の上からはじき出し、典型ではない方の名詞群がヲ格に立つ表現を中心に、行為を表す「する」と「やる」について考察し、前節の表1のような結果が得られた。特にこれまで何らかの行為を表すと言われ、ひいてはあらゆる行為を表すとまで考えられがちだった「する」が意外にもヲ格に立てるような名詞に関するある行為しか表さないことや、その「する」の俗語であるというだけで片付けられていた「やる」にも独自の用法があることがわかった。

今回の調査で「やる」が会話文中での出現が多いことやインフォーマルな内容で用いられることが印象として残った。今後は位相や文体の違いなどにも留意し、文章や談話といった大きな視点での語用にも目を向けていきたい。また、典型的な用法である動作性名詞をとる場合の「する」と「やる」の異同も明らかにし、両動詞の全体像に迫ってみたいと考えている。

注

- 1 「NPガNPヲV」「NPガNP＝NPヲV」「NPガV」「NPガNPヲNP＝V」など多くの構文があり、その上、ヲ格をとる構文だけを見てもヲ格名詞になりうるものは数も多く、その性質・種類も様々である。拙論(1997)参照。
- 2 本稿では「する」と「やる」の比較をするので、両者のヲ格に立たない名詞については基本的には考察外である。また場所・方角・部分を表すような名詞は「する」と「やる」どちらのヲ格にも立てるが、それは文中には現れないある動作を行う場所・方角・部分を示すにすぎず、他の名詞とは異質なので省く。例えば「川向こうをする／やる」の場合、どんな動作を行うのかこれだけではわからない。つまり、動作内容はヲ格名詞にはなく、この語結合の外の要素、例えば清掃作業の場面での発話であれば、その場面もしくはコンテキストによって「清掃」という行為であることがわかり、「川向こう」が「清掃の場所」になるのである。それは言わば、ある動作行為の部分対象である。
- 3 機能動詞は岩崎英二郎(1974)で取り上げられ村木新次郎(1980)で詳細かつ体系的に研究された。
- 4 先行研究では「具体性」「動作性」「意志性」の観点から述べられることが多かった。
- 5 金子比呂子(1985)は話しことばだけを調査した結果「『やる』の『を格』に立つ名詞は行為、動作を表すものが多いだろうと予測していた」が「実際には『を格』に立つ名詞は実に多様であり、(中略)行為の対象が多かった。」と述べている。「行為の対象」という言い方には曖昧さがあるが、「やる」のヲ格名詞にはこのような多様性が見られることは本稿でも確認されたことである。
- 6 形容詞には形容動詞も含むものとする。
- 7 できるだけ網羅的に調査したいと考え、『分類語彙表』を用いて判定した。これを用いた理由は、量的にも内容的にも広範囲なものが偏りなく入っているとの判断によるものである。
- 8 用例が限られていることとこれを別項にする煩雑さを避け、ここに分類する。
- 9 「厭な目つきというものをやってみせた。」のように「というもの」「てみせる」などが付く場合には「やる」が言えるものもかなり出てくる。それは「というもの」によって一般化された名詞句は、直接、名詞句が来る場合と違って「やる」と結合しやすくなること、更に「てみせる」のような実際に動作で示すという意味が動作性の強い「やる」と相俟って、一層ヲ格名詞の幅を広げる可能性があることに起因すると考えられる。しかし、あくまで具体的な名詞句がヲ格に立つ場合を考えるとやはり様相・様子の用法での「やる」表現はかなり限定されたものと言えよう。

- 10 この中の説明に「かなり動作性へと近づき、意志的なものとなっていく。」との指摘もある。
- 11 森田(1977)『『だれかが何かにあることをした』結果、生じた状態』として「犬が首輪をする」を挙げているように、「首輪をする」という連語だけでどちらの文型に属すかが決まるのではなく文中での振る舞いによるものであるが、それでも「B=Cヲする」に入るものは多い。
- 12 「お茶する」で一動詞として使われる場合もあるが、一般的な動詞というよりも俗語的な動詞表現と考え、「お茶をする」も非動作性名詞扱いとした。他には「電子レンジでチンをして、柔らかくします。」など（「チンする」の方が自然）、擬態語は名詞扱いできないので本稿からはずれるが「ゴシゴシする」「ピチャピチャする」「ガンガンする」など幅広い用法がある。一部は「やる」も交替可能。
- 13 「きせるで一服する」も可能であるが、これは動詞「一服する（休憩の意）」である。「祖父はきせるをやる。」は可能だが、「祖父は*きせるをする」は不自然なことからも、喫煙の用法が「やる」だけのものであることがわかる。
- 14 「酒」以外の具体的な酒の種類を表す名詞の場合は「ビールを一杯やってから、焼酎を二杯やった」のように量を示す語句を語結合の間に差し挟む場合に可能な表現である。
- 15 一方「やったあ！」で達成の感嘆を表すことがあり、この用法とは反対のプラス行為である。これは慣用句的な表現であることから一概には論じられないが、マイナス行為とプラス行為という両極端な行為を「やる」が表しうる理由は、「やる」のもつ動作性及び意志性の強さということが関与しているのかもしれない。というのは、「やれるもんならやってみる。」「ええ、やってやるわ。やるわよ。」は「する」を使うと受ける印象が変わる。「できるもんならしてみろ。」「ええ、してみるわ。するわよ。」つまり、「やる」の方が動作完遂に対する強い意志（意気込み）を示しうる。このことは完遂と言うに足る行為、あるいは意気込みを要する行為に「やる」表現が適することを表し、この点が「害悪・殺傷」というマイナス評価の行為から「達成への感嘆」というプラス評価の行為までを大きく包み込む結果となっているのかもしれない。拙稿（1997）に少し触れてあるが、別稿を立て考察したい。
- 16 ここの「お茶」は「茶道」の意であり、前述の「お茶」は「喫茶」の意の場合である。
- 17 趣味の場合、7.1.「遊戯・スポーツ」と重複する場合も見られるが、特に習い事としての趣味を表す用法の場合は「遊戯・スポーツ」とは違って「する」との交替がないようである。
- 18 四字漢語で「する」または「やる」とするものもあるが、「製造販売をする」「精神鑑定をする」などのように後ろの二字漢語が動詞と派生関係にある場合、典型的な動作性名詞と判断する。
- 19 方言だが「うちの青年団の団長をしよったの。（あ、春）」「あんた、焼津でマグロ船の船頭をしよった島村の開吉ちゃん（同）」が見られた。また「此所は隅っこだから番をするには好くありませんね（こころ）」「?番をやる」で「やる」の取りにくい例もあった。
- 20 役職でも「教授」「助教授」はヲ格に立ちにくい。この用法での「講師」「助手」は例のように役割的な意味（講演をする人、手助けをする人）がある。他の役職はこの限りではない。
- 21 「お灸をする／やる」「針をする／やる」など治療関係の名詞は「～（という治療）をする／やる」の意となる場合に交替が可能である。
- 22 森田(1977)の「B=Cヲする」項で『『包丁の背でたたいた豚肉に塩・胡椒をします』のような例もまれにはある。』とあるが、この他に本稿5.2.のような例がある。
- 23 佐藤(1995)の注2に「ネクタイをする」の「ネクタイ」、「教師をする」の「教師」を挙げ、「これらの例は『～をする』の型の構文の中では周辺のなものであると思われるが」とある。
- 24 「一杯」「ちびりちびり」などと一緒に用いられるときに限られる。

- 25 佐藤(1995)では「する」は形式動詞, 「やる」は意味的に抽象度の高い行為思考の他動詞だという結果が出されたが, 機能動詞及びヲ格名詞の変化という観点をとることで, 「やる」にも機能動詞的な働きがあることが本稿で示された。
- 26 中川秀太(2001)は『やる』には主体の〈行為を完遂しようとする積極的な心構えが非常に強い〉と述べ, これについては同様の指摘を拙稿(1997)でも「完遂までを念頭に置いた」「意気込みを必要とする」と述べた通り「やる」の重要な側面の一つである。中川(同)ではVNだけを対象としたが, 本稿では更にVNではない「嗜好品」「人・動物」についても同様のことが言えることがわかった。しかし, この二つの名詞以外(表1参照)は, 「完遂への意気込み」というものが「やる」を使うこと理由として当てはまるものは少ない。ここら辺がこの問題の難しさであり, 細かく考察対象を絞っていく必要性を示すものである。その上で全体像に迫るというやり方を本稿ではとったものである。

用例の出典

(アドレナリン)「アドレナリンドライブ」矢口史靖, (生きたい)「生きたい」新藤兼人, (皆月)「皆月」荒井晴彦, (刑法)「刑法第三十九条」大森寿美男, (あつもの)「あつもの」池端俊策, (あ, 春)「あ, 春」中島丈博『99年鑑代表シナリオ集』より。(愚か者)「愚か者傷だらけの天使」阪本順治・田村竜, (学校Ⅲ)「学校Ⅲ」山田洋次・朝間義隆『98年鑑代表シナリオ集』より。(男)「男はつらいよ寅次郎恋歌」山田洋次・朝間義隆『71年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編映人社より。(痴人)「痴人の愛」谷崎潤一郎, (雪国)「雪国」川端康成, (放浪記)「放浪記」林芙美子, (青春)「青春の蹉跎」石川達三, (モオツァルト)「モオツァルト」小林秀雄, (野火)「野火」大岡昇平, (友情)「友情」武者小路実篤, (こころ)「こころ」夏目漱石, (黒い)「黒い雨」井伏鱒二, (アメリカ)「アメリカひじき」野坂昭如, (二十四)「二十四の瞳」壺井栄, (実朝)「実朝」小林秀雄, (浜菊)「浜菊」伊藤左千夫, (冬の旅)「冬の旅」立原正秋, (野菊)「野菊の墓」伊藤左千夫, (人民)「人民は弱し 官吏は強し」星進一, (ビルマ)「ビルマの竖琴」竹山道雄, 以上CD-ROM版新潮文庫の100冊より。(飛び)「飛び出しナイフ」佐野良二『闇の力』構想社(1996), (レズ)「レズビアン・ライフ」(十八歳)「十八歳のモノローグ」『レズビアン・ライフ』海越出版社(1999)早見 秋, (装飾)『装飾の性』近代文藝社(1995)早見 秋, (本因坊)「本因坊と私」関根金次郎「日本の名随筆別巻11・囲碁Ⅱ」作品社(1992), (五味氏)「五味氏の宝物」佐野良二『北方文芸』第28巻332号(1995)北方文芸刊行会, (みみず)「みみず物語」(みみず2)「みみず物語2」小泉英政「三里塚情報」第360号(1995)一第391号, 以上「青空文庫」より。(学研)『学研国語大辞典』(1978)金田一春彦・池田弥三郎編 学習研究社, (山小屋)「山小屋のラタトゥイユ」金井美恵子『月刊百科』平凡社2001. 10 no.468より

参考文献

- 安達 太郎 (1999) 『『する』の文型と構文』『広島女子大学国際文化学部紀要』7, 105-117, 広島女子大学国際文化学部
- 岩崎 英二郎 (1974) 「ドイツ語と日本語の機能動詞」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』6, 79-93, 慶応義塾大学言語文化研究所
- 王 鉄橋 (1988) 『『する・やる・行う』についての構文的分析』『言語と文化』1, 21-40, 文教大学言語文化研究所
- 大塚 望 (1997) 『『やる』動詞の意味と用法について』筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中

間論文

- 大塚 望 (1999) 「『する』と『やる』—生理・病理現象の表現を中心に—」『言語学論叢』18, 39-52, 筑波大学一般・応用言語学研究室
- 影山 太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』松柏社
- 金子 比呂子 (1985) 「話しことばにおける『する』と『やる』」『ICU夏期日本語講座論集2』, 105-126, 国際基督教大学夏期日本語講座
- 神田 靖子 (1982) 「『する』と『やる』」『日本語教育事典』大修館書店
- 北原 保雄 (1997) 『青葉は青いか 日本語を歩く』大修館書店
- 佐藤 琢三 (1995) 「日本語の行為を表す動詞—外国人に対する日本語教育のための基礎的研究として」『国際関係研究 (国際文化編14)』16-2, 211-225, 日本大学国際関係学部国際関係研究所
- 中川 秀太 (2001) 「動詞『やる』とサ変動詞語幹について」『研究年報』15, 21-29, 日本エドワード・サピア協会
- 中本 正智 (1986) 「やる・する」『日本語研究』8, 39-42, 東京都立大学国語学研究室
- 日野 資純 (1998) 「両形並存の視点から見た方言と国語史—スルとヤルー—」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』, 774-802, 汲古書店
- 村木 新次郎 (1980) 「日本語の機能動詞表現をめぐって」『国立国語研究所報告』65国立国語研究所
- 村木 新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 森田 良行 (1977) 『基礎日本語1』角川書店
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』国立国語研究所資料集6 秀英出版
- 国立国語研究所 (1957) 『総合雑誌の用語 (前編) —現代語の語彙調査—』秀英出版

付 記

査読者の方々からは論文の細部に亘って有益なコメントを賜り、ここに記して感謝申し上げます。

(投稿受理日：2001年6月7日)

(改稿受理日：2001年11月15日)

大塚 望 (おおつか のぞみ)

新潟大学人文学部

950-2181 新潟市五十嵐二の町8050

The functions of 'suru' and 'yaru' in combination with non-verbal nouns with case marker 'wo'

OTSUKA Nozomi
Niigata University

Keywords

nouns with case marker 'wo', meanings and uses, functional verb, substantial verb

Abstract

The purpose of this paper is to define the differences between Japanese verbs 'suru' and 'yaru', both of which denote action, with special focus on their use with some nouns with case marker 'wo'. These nouns are not derived from verbs and adjectives and nouns expressing phenomena, which are 'non-verbal nouns'. Previous researchers have noted that nouns that 'suru' takes are typically verbal nouns. For this reason this paper focuses on non-verbal nouns.

The data in this paper are from a corpus of movie scenarios and novels. The following are the results.

1. Nouns that can combine with case marker 'wo' of 'suru' and 'yaru' are rather limited. 'Yaru' has original uses beyond a slang word of 'suru'.

(1) There are 2 functions of "non-verbal nouns + 'wo' + 'suru'".

- "Sono onnanoko wa aoi me wo shiteiru." (The girl has blue eyes.)
- "Tebukuro wo shite dekaketa." (I went out wearing gloves.)

(2) There are 4 functions of "non-verbal nouns + 'wo' + 'yaru'".

- "Kimi wa tabako wo yaru noka." (Do you smoke?)
- "Konban aitsu wo yaru." (I will kill that fellow tonight.)
- "Gekijou de 'hamuretto' wo yaru." ('Hamlet' is playing at the theater.)
- "Haha wa haiku wo yaru." (Mother is interested in 'haiku'.)

(3) There are 4 functions of "non-verbal nouns + 'wo' + 'suru' and 'yaru'".

- "Tomodachi to toranpu wo suru/yaru." (I play cards with some friends.)
- "Kondo shuyaku wo suru/yaru." (I will play the leading part next time.)
- "Konban uchi de enkai wo suru/yaru." (We will give a dinner party tonight.)
- "Jikka wa ryokan wo shiteiru/yatteiru." (My parents run a hotel.)

2. Table 1 displays the sequence of verb functions and the property of nouns with case marker 'wo'. 'Suru' functions only as a functional verb, but 'yaru' functions also as a substantial verb. This shows that 'yaru' is used more widely than 'suru' with "non-verbal nouns + 'wo'+ verb".

It is worth mentioning that 'yaru' has a negative image.